

肌寒い風の中にも、暖かい日差しが芽吹いた木々を照らす今日。私たち二十八名は、少しの不安と大きな希望を胸に、この通い慣れた亀岡川東学園を、卒業します。

後期課程最後の一年を振り返った時、一番に思い出されるのは、六月に行った修学旅行です。亀岡市で初めての、沖繩への修学旅行。飛行機から見えた美しい海や、大きなジンベイザメがいた美ら海水族館、班別行動で訪れた国際通りなど、楽しかった多くの場面が、昨日のこのようによみがえります。そして、あの美しい沖繩が、太平洋戦争中、日本で唯一の地上戦が行われた地であったという事実を思い知らされた、平和学習。特に、真っ暗な「ガマ」体験では、それまでの世界観が変わってしまったほどの衝撃を受けました。学校に戻った私たちは、学んだことをレポートにまとめ、後輩たちに発表しました。また、文化祭では、戦争を主題とした劇「赤い空の鶴」の上演を決めました。七年生では劇に取り組むことができなかった私たちが、八年生の時に、初めての劇をクラス全員で成功させた経験が、今回の劇の成功につながり、戦争の凄惨さや平和の尊さを、しっかりと伝えることができたと思います。

そしてもう一つ、後期生全員で協力して作り上げた、体育祭のソーラン。クラスでは「声が出ない」という大きな壁にぶつかり、リーダーが涙を流しながら、みんなに思いを伝えたことも、一度ではありません。けれど、最後まであきらめず、お互いの思いを伝え合いました。そんな葛藤があったからこそ、終わったあとにみんな嬉し涙を流せる、最高の体育祭を作り上げることができたのです。

行事以外の日常でも、毎日を生懸命に過ごしてきた私たち。自分ひとりでは乗り越えられないこともあったけれど、私たちの周りには、支えてくださった人がたくさんいました。

これまでお世話になった先生方。楽しくわかりやすい授業はもちろんですが、より興味をもてるよう、私たちの意見を取り入れて工夫してくださいました。質問をしに行くと、嫌な顔一つせず、詳しく教えてくださいました。また、私たちが壁にぶつかり、くじけそうになった時、いつも寄り添い、励ましてくださいました。そんな先生方に背中を押され、私たちは少しずつ成長することができました。「ありがとう」の言葉では伝え切れないほどの、大きな感謝でいっぱいです。そばで支えてくださり、本当にありがとうございました。

そして家族の皆さん。毎日おいしいお弁当を作ってくれてありがとう。心のこもったお弁当は、毎日の元気の源でした。いつも私たちのことを第一に考え、笑顔で見守ってくれましたね。一番近くで勇気をもらえた私たちは、とても幸せです。どんな時でも、私たちの頼もしい味方でいてくれて、本当にありがとう。これからも迷惑をかけるかもしれませんが、どうか温かく見守っていてください。

三年前、私たちの後期課程生活の始まりは、突然現れたコロナウイルスによって、思い描いたものとは大きく異なりました。しかし、これまで共に歩んできた、二十八人の仲間がいたからこそ、普通ではない日常を、乗り越えてくることができました。長い間一緒にいても、それぞれの個性は違い、思っていることも違います。時にはぶつかることもありましたが、そんなときこそ、お互いの思いを伝え合って、乗り越えてきました。その中で、私たちの「絆」も強くなっていきました。先輩たちが残してくれた「伝統」を、よりよいものとして後輩につなぐ。それができたのは、二十八人の涙と笑顔があったからです。

後輩の皆さん、行事の成功には、皆さんの力が必要不可欠でした。私たちとともに、この亀岡川東学園を作り上げてくれてありがとう。さあ、次はみなさんの番です。立ちはだかる高い壁に、くじけそうになることもあるでしょう。でも、私たちがそうであったように、みなさんの周りにも、味方がたくさんいます。長い年月で築き上げた、クラスの仲間との絆を大切にしながら、一年生から九年生までの仲間とともに、よりよい亀岡川東学園を作り上げてください。

「Stand out fit in」。「調和しながらも、一人一人が輝く」という意味の学級目標は、私たちがこれか

ら進む道での、合い言葉でもあります。仲間との何気ない会話、ぶつかり合ったこと、ふざけあったこと、そして笑い合ったこと。仲間とのたくさんの思い出を胸に、これから始まる新しい道を、私たちは歩き始めます。自分の決めた未来で、輝くために。

令和五年三月十三日

卒業生代表

中澤 花梨